カンガルーケアの臨床的効果に関する検討
（ＮＩＣＵ入院中の介入と退院後の連携）

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院周産期センター
分担研究者：前川喜平
研究協力者：堀内勁
共同研究者：笹本優佳、橋本洋子

要約：カンガルーケアの効果を知るため、半構造的質問、対児感情評定尺度、日誌、ケア中の母子の行動観察、退院後にケア終了理由、退院後の母子の生活等を調査した。その結果ケアをおこなうことにより母子間の親密度は促進され、母親として自己達成感が得られた。退院後も母親と児への結びつきが継続的に高まり続け、母親の関心は「既に、いつも」児へと向けられ、母子にとって発達促進的に作用することが示唆された。

見出し語：カンガルーケア　対児感情評定尺度　行動観察　肯定感情　否定感情

緒言：ハイリスク児の発達は児単独の問題ではなく、家庭での養育、母親の受入れと母性の発達が相互にからみながら進行すると考えられる。したがって、未熟児出産と母子分離という傷害的体験を母子がいかに克服していくかが、児及び母親の発達に大きく影響することは容易に推察できる。そこで、カンガルーケアが入院中から退院後にわたって母子の行動・心理にどのような影響を与えるかを調査研究した。

研究目的：ＮＩＣＵ入院中のカンガルーケアが母子の心理・行動に与える影響と、退院後も母子の関係に影響を及ぼすかどうかを検討する。

対象と方法：１９９６年2月から１９９７年7月までの１８ヶ月間に当院周産期センターＮＩＣＵに入院し、カンガルーケアをおこなった極低出生体重児の母子を対象とした。開始時期は人工換気が終わった修正32週以後とした。

１．母親のカンガルーケア開始前と開始後３回目の感想を知るため「カンガルーケアをはじめる前は（　　）であった。実際におこなってみると（　　）であった」という半構成的な質問を２０組の母子におこなった。

２．花沢成一による対児感情評定尺度を用いて開始前、３回終了時、退院時の対児感情の推移について３４組の母子について検討した。

３．母子の愛着形成過程を知るために、毎回記載するカンガルーケア日誌の内容を肯定的感想、否定的感想、児の観察にわけて検討した（４９組）。

４．カンガルーケア実施中の児の状態評価をおこない、母親との密着により児の安定度が変化するかどうかを検討した（４２組）。なお状態評価はＮＢＡＳを用いた。

５．カンガルーケア中の母親の行動観察を初回及び３回目におこないっ。観察項目は表情、態度、視線、児が泣いたときの母親の行動である。（１２組）。

６．郵送質問紙を用いてカンガルーケア終了についてと修正6ヶ月での１日の生活リズム調査（中農による）をおこなった（２８組）。

結果：１．カンガルーケア開始前と３回終了後のカンガルーケアに対する気持ちは、実施前はケアを早くやってみたいと考えていたものは４名にすぎず、ケアに対して不安・心配と答える親が１０名と半数を占めていた。３回実施後には嬉しい、安心、母親としての実感、母子のコミュニケーションがとれた、感動的、リラックス・穏やかな気持ちになれた等の親密感と肯定的感情を表出するものが１８名と肯定的感想が多かった。

２．対児感情評定尺度の得点変化は接近得点開始前２７．９±６．７点であったものが３回終了時には３０．５±７．５点と危険率１％以下で増加し、退院時には３２．０±７．２％とさらに増加した。しかし、回避得点は開始前６．２±４．３点、３回終了時５．３±３．８点、終了時５．６±３．５点と有意な変化は無かった。拮抗指数は開始前２２．９±１５．４、３回終了時１７．９±１２．３、終了時１８．３±１２．０と３回終了時に危険率５％以下で有意に低下したが、退院時の低下には有意差はなかった。

３．カンガルーケア日誌に記載された母親の感想を表１に示した。初回には９４％の母親が肯定的感想をあげているが、始めての経験での戸惑いの記述が否定的感想として述べられている。児の観察の記載は、児にとっても慣れない経験であると母親がとらえていることがわかる。記載のないものは僅かに１名（６％）のみであった。３回になると初回に表出された我が子への接触がもたらす感激はやや薄れ、かわりに母親になった実感とリラックスしていることが伺える。同時に、否定的感想も具体的記載として出現し始めるが、頻度は初回よりも減少している。また児の観察についても安定した記載が増してくる。５回となると肯定的感想は減少するが、母親としての実感が述べられている。逆に否定的感想は２７％と増し、カンガルーケアによる母子のつながりが、児への否定的気持ちも引き出している。しかし、この一種の危機的状況も否定的感想が８回以降少なくなることから解消されていくことがわかる。この間、記載無しが増していき、１０回の時点では６８％の母親が何も記載しなくなるのはカンガルーケアによる母子のつながりが"当たり前のこと"、日常的なものとなったことを示唆している。

４．カンガルーケア中の児の状態の推移は図１に示す。図１上段に１回のケア中の児の状態を示した。ケア開始直後は目覚めている児が中頃になると静睡眠が増すことがわかる。ケア終了時には中頃に比較して覚醒してボーツとしていることが多くなる。図１下段に経時的なケア全体に占める各状態の比率を示した。初回と３回では静睡眠、動睡眠の比率はかわらないが、１０回では覚醒していることが増し、母親への反応も増している。１５回では覚醒が増し、ぐずって泣いたり、なだめられないような状態も増す。

５．図２にカンガルケア初回時と３回目の母親の行動観察の結果を示す。初回は緊張し、心配そうで、リラックスできず、おどおどしている様子の母親も、３回目には既ににこにこし、穏やかで、リラックスでき、中には居眠りするものもある。また母親は圧倒的に我が子を見ているが、３回にはモニターや、周囲、他人の子を見回したり、余裕が出てくることがわかる。我が子が泣いたときの行動は初回には自分であやすことができずオロオロする母親もいるなかで、３回となるとオロオロするものはなくなり、自分であやすようになる。

６．質問紙によるカンガルーケア終了時期は７５％の母親が退院までつづけ、退院前に終了したものは２５％であった。平均カンガルーケア施行回数は１３．４回であった。カンガルーケアを退院前に終了した理由は嫌がったから８５．７％、ケア以外の刺激を好むようになったから４２．９％、授乳のほうが楽しくなったから１４．２％であった。退院後の生活記述では生活の時間配分はカンガルーケアをおこなった群もおこなわなかった群も差がなかった。表２に母親の記述内容を示したが、ケア非実施群はひとり遊びが多くなってきた、喃語が出てきた、声を出して笑うよう

になった等と育児書に書かれているようなステレオタイプな記載が多いのに対し、カンガルーケアを経験した母親では犬のお巡りさんが気にいっていてこの歌を歌うと笑う、アンケートを書いているのがわかるのか、いい子にしているなどと実際の我が子の様子を活き活きと描写するものが多く、記載された文字数もカンガルーケア非実施群では１０２字に対して、カンガルーケア実施群では２５２字と有意に多かった。

結論：カンガルーケア実施により主として母親の児への接近が強くおきることが示唆され、それとともに母親としての自己達成感が促進された。カンガルーケア５回頃に母親の否定的読みとりが強く出ることがあった。しかし、それも母子の相互交流の中で、通常のものとして受容されていった。

児は、カンガルーケアという皮膚接触により生じた原始的愛着と安心感・安全感を表出し、さらには原始的自己主張を母親に表示するように変化していったように考えられた。

退院後も母親と児への結びつきが継続的に高まり続け、母親の関心は「既に、いつも」児へと向けられており、母子にとって発達促進的に作用する可能性が示唆された。

以上のことから、カンガルーケアの開始は全身状態が安定した時点でなるべく早期に開始することが望ましい。その終了は児への肯定的感情がわく早期で終了せず、否定的感情が表出され、さらに肯定的感情と否定的感情双方を親が抱え込めるようになるまで継続することが望ましく、それは約１０回程度であると考えられた。しかし、回数については医療者が指示するのではなく、母親の自然な感情表出に従ってケアをすすめることが大切であると考えられる。

表１　　カンガルーケア日誌に記載された母親の感想

回数	肯定的感想	否定的感想	児の観察	記載無し
初回 ３６名	嬉しい・安心 小さくても生きている ９４％	呼吸が心配・緊張する・怖い あつい・抱き方がわからない ２４％	もぞもぞ キョロキョロ ４５％	６％
３回 ３６名	一緒に眠る・母親の実感 児のことがよくわかる ６１％	嫌な顔をする 呼吸が心配 １８％	色々な表情をする よく眠っている ６５％	３５％
５回 ３４名	児の感情がわかる 私の胸の中だとなだまる 私の話がわかるよう ３１％	落ち着かないから ママも落ち着かない 普通の抱っこのほうが 好きみたい ２７％	よく眠っている ママの乳首で遊んでいる ５１％	４９％
８回 ２７名	母になってよかった 私の身体の一部みたい 私が一番みたい ４９％	あつい・オッパイが出ない ８％	よく眠っている 私を目で追う ４１％	５１％
１０回 ２２名	私にすりよってくる ２６％	汗をかく ７％	よく眠っている ３２％	６８％

表２　　退院後の生活記述

カンガルーケア実施群	カンガルーケア非実施群
犬のおまわりさんが 気にいっていて、 この歌を歌うと笑う	ひとり遊びが 多くなってきた
アンケートを書いているのがわかるのか、 いい子にしている	喃語が出てきた
泣き方の違いがはっきり違い、 言いたいことがわかる	声を出して 笑うようになった
適当にされると「こっち見て」と 泣いてアピールする	高い高いをすると喜ぶ 夜必ず機嫌が悪くなる
２５２字 （５９字～４６６字）	１０２字 （　０字～１８４字）

表１　カンガルーケア中の児の状態の推移

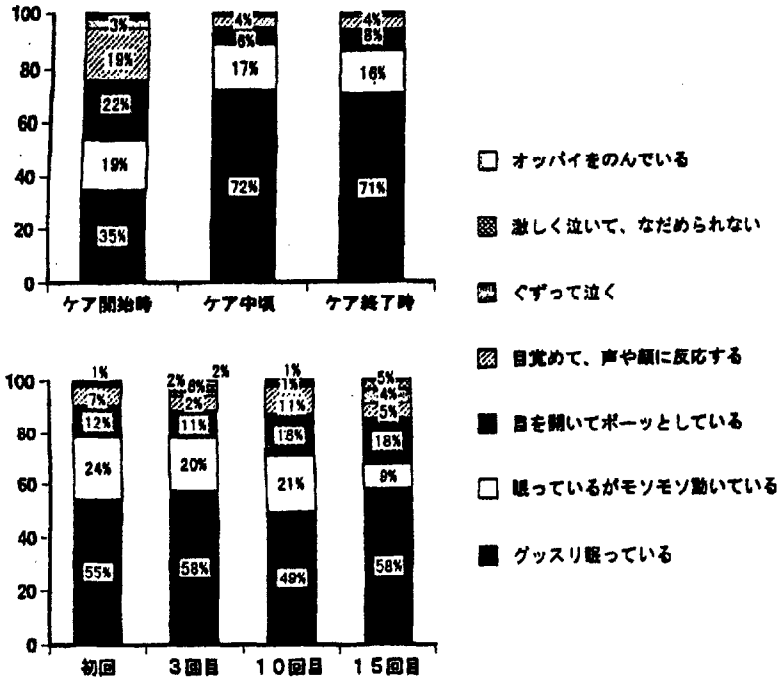
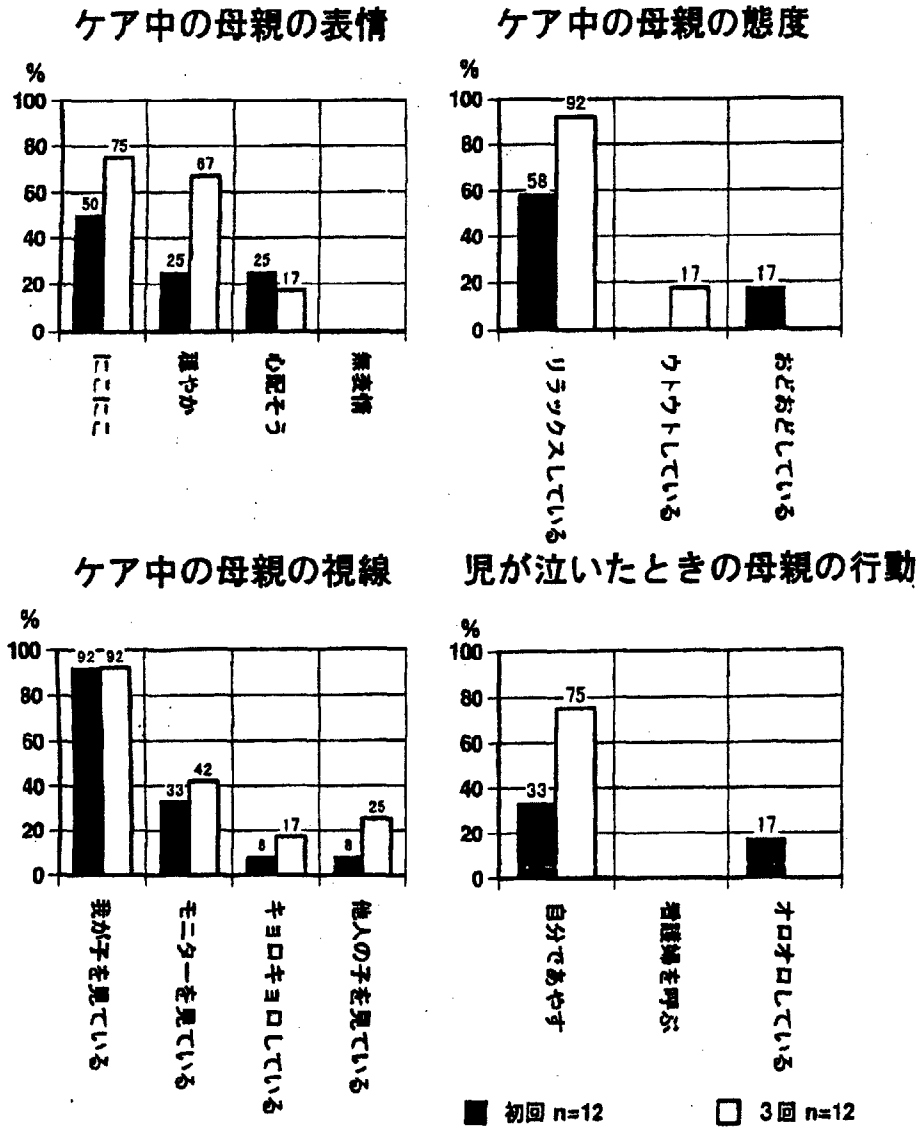


表２　カンガルーケア中の母親の行動観察



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:カンガルーケアの効果を知るため、半構造的質問、対児感情評定尺度、日誌、ケア中の母子の行動観察、退院後にケア終了理由、退院後の母子の生活等を調査した。その結果ケアをおこなうことにより母子間の親密度は促進され、母親として自己達成感が得られた。退院後も母親と児への結びつきが継続的に高まり続け、母親の関心は「既に、いつも」児へと向けられ、母子にとって発達促進的に作用することが示唆された。